

二〇二二年一月二二日

合掌の軒すだれなす大氷柱
天平の大塔仰ぎ大根干す
焚火する大工火種の匏屑
点々と岩場に居るは海苔摘み女

凡士
凡士
素秀
こすもす

二〇二二年一月二二日

懐の小犬顔出す焼芋屋
大寒や墨壺弾く船大工
風花す部活の子等の校庭に
四温晴心も灰とほころびぬ
片足の戦禍の鳥居冬日さす
熱爛や釣果一尾に舌鼓
初場所や鬻も結へぬが勝ち名乗り

なつき
素秀
あひる
たか子
ぼんこ
豊実
凡士

二〇二二年一月二〇日

わが影をみて背を伸す寒さかな
臘梅を活ければほろと金の粒
引きずりし手櫂の中に子は寝落ち
ことごとく物に影あり日脚伸ぶ

なつき
明日香
豊実
みきお

二〇二二年一月一九日

藁苞を覗く雀や寒牡丹
朝陽燦梢に残るしづり雪
風花の舞ひ散る路地に立ち話
朱を極めいよよ華やぐ寒ぼたん
山里の闇の深さや冬銀河

智恵子
みづき
ぼんこ
邑
隆松

雲上に雪の伊吹峰今朝晴るる
隆松

日かげりてより蠟梅のつつましく
菜々

二〇二二年一月一八日

風花の窓に額を押し付けて
満天

片側は凍てつきしまま川堤
こすもす

二〇二二年一月一七日

牡蠣殻の積み重なりて宴果つ
あひる

錆び深き手押しポンプや寒の水
やよい

左義長の火掻きの竹の爆ぜにけり
なつき

藁苞に箱入り娘寒牡丹
宏虎

電線に音符ならびす寒雀
やよい

千代の春ダイヤ婚過ぎ卒寿来る
宏虎

剥製の鷹の眼ひかる樽明り
凡士

寒九の水六腑に染みて薬飲む
やよい

悴める身体湯船に溶けゆけり
凡士

毎日句会みのる選・二〇二二年一月二四日